

藤門会 公開シンポジウム

【日 時】 2019年11月16日(土) 14:00~18:30

【会 場】 中野サンプラザ 7F 研修室 10
中野区中野 4-1-1
JR中野駅および東京メトロ東西線中野駅 北口

【対 象】 医療関係者

【定 員】 100名(先着順)

【参加費】 3,000円

【プログラム】

14:00~18:30

座長 漢方医療 頼クリニック 頼建守先生

「小柴胡湯“物語”」

熊本赤十字病院 加島雅之先生

ディスカッション

座長 漢方医療 頼クリニック 頼建守先生

千葉大学大学院医学研究院和漢診療学准教授 並木隆雄先生

会場の都合がございますので、参加される方は事前に FAX またはメールにてお申込みください。

ご住所： _____

お電話番号： _____

ご所属： _____

お名前： _____

mail： _____

藤門会 <http://www.tomonkai.com>

【事務局】 ジェーピーエス製薬(株)内 藤門会事務局 平
〒224-0023 神奈川県横浜市都筑区東山田 4-42-22
TEL 045-593-2061 FAX 045-593-2069
e-mail: m-taira@jps-pharm.com

小柴胡湯には長い物語がある。

その始まりは、少なくとも 2500 年以上前の経絡学派と三焦学派などの様々な流派の対立と統一の過程で生じた扁鵲派や黄帝派といった基礎理論の形成や、散丸派（おそらく“疾医”）と湯液派（おそらく“食医”）などの治療法の展開といった草創期の中国医学の形成の過程で、歴史の交点で生じた“原”仲景方の一つにあたる方剤であった。原仲景方に選ばれた理由とその応用法は、3 世紀に東アジア襲った壊滅的な災厄により人口が 100 年で 1/8 まで減少するという危機的な状態に対抗するための、懸命な医療の戦いで生じた、当時の医学を集学的に応用するための大統一理論の形成と応用・発展で重要な優秀方剤であったからに他ならない。

後漢代に主流であった、急性感染症に対する三焦・腠理系統の治療法で瀉法中心であった散丸派の薬物療法が、内外併病の重症病態への対応で困窮した。そこに主に内外の気の交流の調整を介して治療を行った経絡・臟腑派の分析と結びついて、重症疾病の内外同治、補法から始まり、やがて補瀉併施にいたる湯液派の薬物療法に展開する。この媒介をもたらしたのは、月の満ち欠けに対応した三陰三陽であった。その中でも、小柴胡湯は、桂枝湯と並ぶ内外同治・補瀉併施の代表的な方剤であり、三陽病から陰病両感に移行する病態を治療する方剤として利用されてきた。この両感に移行する接点となるのは、古くは膏肓とよばれ、後に関格と呼ばれる、膈の病態であり、小柴胡湯は膈から中焦と上焦を通散しながら、臟を守る方剤であった。

北宋に傷寒論研究が盛んになった際に、成無己が小柴胡湯の適応を半表半裏＝少陽病としたことが、臨床応用を簡便にした一方、幾多の誤解の原因となり傷寒論そのものの理解ができなくなる大きな要因となってしまった。

次に医学の転機を迎える南宋代において、エポックメイキングな方剤である補中益気湯もまた、小柴胡湯の中に封じ込められた経験と理論を違う形で抽出することで創方された。

現代につながる漢方の始まりとなる明代、その中でも後世に強い影響を与えた薛己は、彼の中核理論である肝・脾の不和を調整する方法として、小柴胡湯を採用し、その考えの発展上に、逍遥散や帰脾湯に“加味”を行うようになる。さらに、“熱入血室”を応用し、血熱に対する治療に小柴胡湯を使用し、来る清代の葉天士の透熱転気法につながっていく考え方の先鞭となったと思われる。

明代の万病回春では、温胆湯を小柴胡湯加減方とすることで、同方剤を急性感染症の方剤と理解する先鞭をつけ、更に清代の葉天士の温病の半表半裏に対しての潤し下焦から除く治療として温胆湯加減の開発につながっていく。

日本においても明代医学の延長線上に小柴胡湯は幅広く応用され、それを素地に傷寒論の小柴胡湯加減方も盛んに応用されることとなる。

このような変遷をみながらくつかの経験も踏まえて考察を試みたい。

この物語の行く末をみつめて。